
ベランダのある部屋

小仁沢 為絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベランダのある部屋

【Nコード】

N9086S

【作者名】

小仁沢 為絵

【あらすじ】

木造おんボロアパートに暮らす、トオルくん、ハコちゃん、てっちゃんのなんてことない日常を描いた連作短編。

星降る夜に

いつものように屋上に出て星を眺めていた。こういう星がよく見える夜は、築二十年木造ボロアパートも風情があつていいなと思える。アパートのまわりが木で囲まれているから、森の中で星を観察しているような気分になるのかもしれない。

冷蔵庫のなかに入っていた気の抜けたアップルフィズの残りをちびちび飲んでいると、なんだか無性に寂しくなってきた。誰かこないかと思い、辺りを見渡してみると、ちょうどハコちゃんが屋上にやってきたところだった。

ハコちゃんは僕に気付くと大きく手を振った。

「やつぽートオルくん」

「やつぽーハコちゃん」

ハコちゃんは僕の隣に座り、持参した缶ビールのプルトップを開けた。

ハコちゃんは僕と同じくこのボロアパートに住んでいる。一年前この屋上ではじめて話をした時についたあだ名がハコちゃんだ。ハコちゃんの本当の名前は『葉子^{よっこ}』と言う。

「ハコちゃんお風呂屋さん行ってきた？」

「そうだよ。何で？」

「いい匂いするから」

「そう？」

ハコちゃんが自分の体の匂いを嗅ぎはじめた。

「てっちゃんは？来てないの？」

「そのうち来るんじゃないかな。あ、ほら。噂をすれば」

振り向くと、てっちゃんが僕らのほうにむかって歩いてきていた。心なしか足元がおぼつかないような気がする。

「やつぽーてっちゃん」

ハコちゃんがてっちゃんに気付いて挨拶をした。てっちゃんは少

し寂しそうな薄ら笑いを浮かべながら「おう」と返した。ハコちゃんの隣に座り膝を抱えてぼーっと下を見つめている。

「てっちゃん、何かあったの？」

ハコちゃんが言った。

「まあな」

てっちゃんは曖昧に頷いただけで、その後を続けようとはしなかった。

てっちゃんが何も言わないから僕らも何も言わない。言いたくなったら言うだろうし、言いたくないんだったらそれでもいい。

僕は星を眺め、ハコちゃんはビールを飲み、てっちゃんはぼーっとして、それぞれの時間を過ごした。

ふと僕は一年前、初めて屋上にきた日のことを思い出した。

連日の雨でたまった洗濯物を干したくてうずうずしていた僕は、夜になって雨があがるとすぐにベランダに洗濯物を干した。三日もためた洗濯物はスペースが足りず、残りのものは屋上に干すことにして部屋を出た。

屋上につづく階段の前で、ばったりてっちゃんに会った。そのころはまだ『斜め向かいのチンピラ風の西川さん』くらいの認識しかなかった。

お互い夜の挨拶をしたあと、洗濯籠に目をとめたてっちゃんが「洗濯物干すの？」と笑いながら言った。

「ええ、まあ。西川さんは？」

「星を見ようと思って」

「星ですか？」

「いいよ、星は」

僕とてっちゃんは連れ立って屋上に向かった。雨が上がったばかりの空には、すでに雲は一つもなく、満点の星が輝いていた。

「きれいだね」

僕が言つと「そうだろう」とてっちゃんが得意そうに返した。僕はしばしの間、無言で夜空に輝く星を眺めた。

「今にも降ってきそうだな」

「雨が？」

「星が」

「そうですね」

星が降る、か。見た目はチンピラっぽいのに、なんだかロマンチックなこと言う人だな、なんて思っていたっけ。

「星降る夜、こんなに綺麗な夜なのに、あの子どうしたんだろう」
そう呟いたてっちゃんの視線の先には、事故防止のために設けられた柵に寄り掛かり、泣きながら一人でビールを飲むハコちゃんがあった。

「初めてここで会った日のこと覚えてる？」

ハコちゃんが突然言った。

「覚えてる。僕もちょうど同じことを考えてた」
てっちゃんは何も言わない。

「あの日、ずーっと大事に大事にしてた金魚が死んじゃってさ、あんまり悲しくて、どうしていいのか解らなくなっちゃって、とりあえず飲んで忘れるしかないなあとと思って泣きながらひたすらビール飲んでたら、そこにトオルくんとしてっちゃんが来たんだよね」

「ハコちゃん一人で本も開けててびっくりしたよ」

「あたしもびっくりだった。今までほとんど口をきいたことない西川さんが現れて『悲しいことでもあったの？』なんて言うんだもの。今だから言っちゃうけど、あたし、てっちゃんのこと怖い人だと思ってたの。だからあの時、声かけてくれて嬉しかったという気持ちよりも、あたし何されちゃうんだろって恐怖の方が強かったんだ」

ハコちゃんひどいな。まあ僕もそれまではてっちゃんとはあんまり関わりたくないって思ってたけど。

「あの時てっちゃん、あたしに言ったよね。『空を見る、星を見る』って。『空の広さ、星の輝きを見たら自分が悩んでることなんてひどくちつぽけで、滑稽なことに思える』って」

「言ってたね、そういえば」

「あたしの金魚のことをちつぽけで滑稽だなんてひどい人って思ったけど、あの日の雨上がりの夜空は本当に綺麗で、少しだけ悲しい気持ち薄れたんだ。その後てっちゃんもトオルくんも一緒にお酒飲んで騒いで楽しかったよね。今でも時々悲しくなるけど、てっちゃんの言ってた通りに空を見ると、星を見ると、やっぱり少し気持ち楽になるんだ」

てっちゃんは相変わらず下を見ている。僕とハコちゃんは星を見ながらてっちゃんの言葉を待った。

少し間をおいて、てっちゃんが顔を上げた。

「ふられたんだ」

低い声でてっちゃんがつぶやいた。僕とハコちゃんは顔を見合わせ、てっちゃんのほうに向き直った。

「どうして？結婚の話もしてたんでしょ」

僕が言うとしてっちゃん長いため息をついた。

「それがさ、あいつが言うには俺は優しすぎるんだと」

「優しすぎる？」

それはどういうことなんだろう。自分の彼氏が優しいならすごくいいことじゃないか。

「あいつは俺の優しいところが好きだって言ってた。だけど優しすぎるのは嫌だって。誰にでも優しくして、誰が一番大切なのか解らないって」

てっちゃんは再び下を向き、独り言のようにぶつぶつ喋った。

「俺はあいつが大好きだったんだ。世界で一番大切な存在だったのに。何でこんなことになっちゃったんだろ。何が間違ってたんだろ。」

どうしてこんなことになったんだろ」

傷のついたレコードみたいに同じ言葉を繰り返すてっちゃんの手を、隣に座るハコちゃんが強く握りしめ、あっけらかんとした調子で言った。

「ふられるくらいどうってことない。女なんてさ、それこそ星の数ほどいるんだから、てっちゃんならそのうちまたいい人見つかるよ」
ハコちゃん、うまいこと言うな。

「てっちゃん言ったじゃない。例え世界に裏切られても星は俺らを裏切らない。いつも空で輝いてくれている。だから希望を持てるって」

うつむいていたてっちゃんが勢いよく顔をあげた。

「え、俺、そんな恥ずかしいセリフ言ったのか？」

「言ったよ。僕がバイトクビになったときにね」

会社の金を横領したって汚名着せられて解雇された時、優しすぎるてっちゃんは一緒になって怒って、泣いて、励ましてくれたつけ「お前には悲しい時に見あげられる星がついてる。泣きたいときには、すぐ側に俺がついてる、とも言ってたよ」

てっちゃんは顔をしかめ、また長い溜息をついた。

「いいんだよ、泣いても」

「いや、泣きはしないけどさ。そんなことお前らに言ってたなんて全然覚えてなかった。恥ずかしい奴だな、俺って」

「今頃気づいたの？」

ハコちゃんが可愛らしく笑って、空を仰いだ。

「てっちゃん、星が綺麗だよ」

僕もてっちゃんも同じように空を仰ぐ。あの日の、あの雨上がり
の空には劣るけど、墨染の夜空には星が輝いていた。

すぐに悩んだり落ち込んだりする、弱い僕らを照らす希望の星が、
確かにそこにあった。

「あたし、てっちゃんのこと大好きだよ。あ、もちろんトオルくんも大好き」

「僕もてっちゃんのこと、ハコちゃんのこと大好きだよ」
てっちゃんには星がついてる。すぐ側には僕らもいる。

目が合うと、てっちゃんは少しだけ照れくさそうに微笑んだ。

「俺も、お前らのこと好きだよ。星空と同じくらいにな。俺には星といい友達が二人も付いてんだから、ふられるくらいどーってことねーよ」

それは強がりだったかもしれないけど、そう言ってもらえて僕は、それにきつとハコちゃんもすごく嬉しかった。

「て言うか何で僕たちお互いに告白しあってたんだろうね」「ねーおかしいよねー」なんて笑いながら、そうして僕らはいつまでもいつまでも、夜空に瞬く星を眺めていた。

f i n

星降る夜に（後書き）

拙い文章をご覧いただき、ありがとうございました。

数年前にサイトにあげたものを加筆・修正しましたが・・・あまり意味がなかったようにも思われます（汗）

このお話は連作短編となっております。また次のお話でお目にかかりますように。

六月誕生感謝祭

六月といつて思いつくもの。

梅雨、紫陽花、花嫁、かたつむり、六月は祝日がない、それからそれから・・・あ、私の誕生日。

始め、トオルくんとてっちゃんが誕生日パーティーをやってくれと言ったとき、私は断った。

誕生日なんて毎年来るものだし、それに私は三人の中で一番年下とはいえ、もう、誕生日を祝ってもらうような年齢じゃないから。と言いつつも、あの二人がそんな理由で誕生日パーティーを断念するとはちつとも思っていなかったんだけれど。

「ハコちゃん、入るよ」

トオルくんの声で目が覚めた。

重い目蓋を持ち上げると部屋の玄関にトオルくんが立っていた。

「やつぽートオルくん」

私は力なくトオルくんに手を振る。

靴を脱いだトオルくんが心配そうな面持ちで私に近づいてきた。

「寝てたの？ハコちゃん具合悪いの？」

「ちよつと・・・お腹痛くてね」

「お腹？どの辺？」

トオルくんが私のお腹を擦ってやろうとも思っただのか、手を伸ばしてきた。

「触らないで」

ぴしゃりと言いつつと、トオルくんは一瞬怯えたように肩をすくめ、すぐに「ああ、」とひとりごちる。

「お客さんか」

「そついうこと言うと、女の子にもてないよ」

「いいよ。僕にはハコちゃんがいるもの」
自分でも顔が赤くなるのがわかった。

トオルくんは恥ずかしい人だ。でも私は、トオルくんのそんなところが好きなんだよね。

「てっちゃん、雨降りそうだからハコちゃんの部屋でパーティーしようって。今、ケーキ買いに行ってる」

「やっぱりやるんだね」

「嫌だ？」

「とんでもない。嬉しいしありがたいよ」

ただ、なんとなく、気恥ずかしいなーなんて。

「ハコちゃんの誕生日だもん。ちゃんとお祝いしなきゃ」

「でも、来年も再来年も、ずっとその先の未来も、私が生きているかぎり私の誕生日は必ずやってくるんだよ？」

「それなら、来年も再来年も、それからずっと先の未来の誕生日も、来るたびに祝えばいいじゃない」

トオルくんと正式にお付き合いを始めてから2か月たつけど、もしかしてこれって、遠回しにプロポーズされてるのかな？ちよつと気が早過ぎるんじゃないかな？

「昔の人が言ってたって。誕生日はその人が生まれてきてくれたことに感謝をする日、いわば感謝祭なんだって」

トオルくんはやりわりとした口調で言った。

「昔の人って誰？」

「それは解らない」

「それって本当の話？」

「それもどうだか」

いい加減だ、トオルくんは。

「でも、僕はその話信じるよ。ハコちゃんが生まれてきてくれたこと、ハコちゃんに出会えたこと、ハコちゃんが今僕の側にいてくれること、僕はすごく嬉しいから」

トオルくんが、寝ている私の顔を覗き込む。

「ありがとう、ハコちゃん」

そう言い、トオルくんは顔を近づけると、そのままのためらいもなくキスをした。

「これは僕から、ハコちゃんへ、感謝の気持ちを表したプレゼントね」

突然のことに呆気にとられている私をよそに、トオルくんはいつもと同じやんわりとした口調で

「誕生日おめでとう」

と言って、照れたように笑った。

《FIN》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9086s/>

ベランダのある部屋

2011年6月1日06時10分発行